

# 善男と幽霊

## ——中世ユダヤ説話解釈の一例——

飯 郷 友 康

ユダヤ人の間に伝わる怪談を紹介する。後注語句解説と併読していただきたい。

ある善男の件。飢饉の年、大晦日の晩にデナリ一枚を貧者に施した。<sup>(1)</sup>

女房に叱られ墓場に行つて寝ると、幽霊二人の話しあう声<sup>(2)</sup>がした。一人が「そとをうろついて、世間にどんな厄がつくか御簾の後ろで聞いてこようよ」と言う<sup>(3)</sup>と、相手が「それは無理、わたしは葦の布を巻かれちゃったから。あなたが聞いてきてよ」と言う<sup>(4)</sup>。うろついてきたほうに相手が「御簾の後ろで何を聞いたの」と言う<sup>(5)</sup>と、「九月の末に種を蒔くと雹で枯れるって聞いたよ」という<sup>(6)</sup>。男は種を十月の初めに蒔いたので、世間のはみな枯れたが自分のは枯れなかった。<sup>(7)</sup>

翌年も墓場に行つて寝ると、あの幽霊二人の話しあう声<sup>(8)</sup>がした。一人が「そとをうろついて、世間にどんな厄がつくか御簾の後ろで聞いてこようよ」と言う<sup>(9)</sup>と、相手が「それは無理って言ったじゃないの、わたしは葦の布を巻かれちゃったから。あなたが聞いてきてよ」と言う<sup>(10)</sup>。うろついてきたほうに相手が「御簾の後ろで何を聞いたの」と言う<sup>(11)</sup>と、「十月の初めに種を蒔くと嵐で倒れるって聞いたよ」という。男は九月の末に種を蒔いたので、世間のはみな倒れた

が自分のは倒れなかった。<sup>(8)</sup>

それで女房が「これはいったいどうしたんだい。よそのはみんな枯れたのに、あんたのは枯れなかった。今年もよそのはみんな倒れたのに、あんたのは倒れなかった」と言うので、事の次第を話してやった。それから幾日もしないうち、善男の女房はあの小娘の母親と喧嘩になつて、「あんたの娘が葦の布を巻かれてるのを見に行こうじゃないのさ」と言ったそう<sup>(11)</sup>な。

翌年も男が墓場に行つて寝ると、あの幽霊二人の話し合う声<sup>(12)</sup>がした。一人が「そとをうろついて、世間にどんな厄がつくか御簾の後ろまで聞きにいこうよ」と言う<sup>(13)</sup>と、相手は言った、「よしてよ。生きてる人に話を聞かれちゃった」<sup>(14)</sup>。

以上、仮に題を「善男と幽霊」とする。出典はユダヤ口伝教学大全『タルムード』「祝祷篇」<sup>(15)</sup>「十八丁裏」<sup>(16)</sup>。また格言故事集『ナタン先生<sup>(17)</sup>の祖師篇<sup>(18)</sup>』甲版第三章八節も同話を伝える。二書の編纂時期は古代末期、およそ西暦紀元五世紀から七世紀のあたりか。ともかく現在この説話を確認できる最古の文献である。

中世ユダヤ人は、こうした古典に取材し様々な説話集を編纂した。そのうち特に人気を博した作品のうち、まず一五一六年サロニカ刊ヤコブ・ベン・ソロモン・イブシハビブ著『ヤコブの泉』<sup>(19)</sup>「祝祷篇」は全一

三六話中第六〇話に、また一六〇二年バーゼル刊ヤコブ・ベン・アブラハム著『<sup>マテウス</sup>故事書』は全二五四話中第一二〇話に、この「善男と幽霊」を収める。古代から中世にかけて広く普及した説話であると言える。なにやら日本昔話にも通じるような雰囲気の漂う話で面白いのだが、当のユダヤ人は如何に語り伝えてきたのか。その受容過程を追う。

## 1. 古代説話伝承・意味の変動

まず、タルムードと『ナタン先生の祖師篇』を比較する。細かい表現の違いはさておき、最も気になるのは、『ナタン先生の祖師篇』が「大晦日の晩に」の一句を欠くことである。この状況設定は、文字に定着する以前もともと口頭伝承として浮動する段階で語られたり語られなかったりする程度の句だったらしい。とすると、この話の舞台は、大晦日の晩であつてもなくともかまわなかった——つまり重要ではなかったのか。それとも、話の内容からして舞台は大晦日の晩であることは明らかなので、いちいち前置きをしなくてもよかつた——つまり、実は重要であるのか。どちらかといえば、後者の可能性が極めて高い。その根拠は、まず第一に、この説話に語られる「天上の御前会議」はユダヤ文化おなじみのモチーフで（注3参照）、それが来年の予定を決める会議ともなれば歳末こそは開催時期にふさわしいから。しかし、これについては別方面の膨大な考証を要するので立ち入らない。あくまでタルムードと『ナタン先生の祖師篇』のみに則して言えば、この並行伝承の間にある最も大きな違いは、説話の置かれる文脈である。話は同じでも意味付けがまるで違うので、その違いが第二の根拠となる。

まず『ナタン先生の祖師篇』の文脈を確認しておく。この書物の編成は、まず歴代祖師の格言を挙げ、ついで関連する故事を羅列する。三章末から四章にかけては様々な善行の大事を説く格言と、そうした善行の

功德を描く故事が続き、そのうちの一つがこの説話「善男と幽霊」である。つまり編者は、この話を「貧者に施しをすれば富を得る」「それほど大きな施しの功德も、隣人と喧嘩すれば不意になる」という訓話、あるいは例話として理解していたらしい。

その同じ話が、タルムードでは異なる様相を帯びる。この書物の性格を一口で説明することは難しいのだが、あえて大雑把に言うくと、まず口伝律法を提示し、それにまつわる歴代律師の論義を問答形式で延々と叙述するので、話題は多岐に及ぶ。たとえば、この説話を収める「祝祷篇」の場合、祈禱に関する行儀作法を論ずる全九章のうち、第三章は特に葬儀を論ずる。つまり、死者の送りかた（その際の祈禱となると、死者への語りかけかた）を論ずるので、「死」そのもの、あるいは「死」のありようにまで話が及ぶうちに、ある問題が提起される——われわれ生者は死者を哀悼し追憶するが、そもそも当の「死者は、この世の出来事を感知するのだろうか」。そこで肯定派と懷疑派が談義を重ねることになる。こうした白黒つけがたい話題については懷疑派が有利で（「そんなことはない」と言えば済むから）、肯定派は幾つも証拠の事例を挙げなければならぬ。そうした事例の筆頭が、この説話「善男と幽霊」なのである。肯定派の論旨を要するに、小娘が葦の布に包まれて埋葬された、その事実を生者（善男の女房）が口にした、その場に小娘（の死霊）はいなかった、にもかかわらず、その事実を生者が口にしたことを知っていたのだ、この世の出来事を「死者は感知するぞ」。しかし懷疑派は言う、「たまたま娘の母親と善男の女房の喧嘩を目撃した人が死んで、あの世で娘に伝えたのかもしれないぞ」、証拠不十分——。話の続きには後で戻るとして、ひとまず指摘するが、こうした論義の話題となる説話が「大晦日の晩」の出来事である必然性は全くない。にもかかわらずそのように語られるのは、もともとの伝承にそなわる設定であつたから、と

考えるのが妥当だろう。

## 2. 中世の受容、説話編集の手際

ここで一旦、中世説話集を参照する。まず『故事書』第一二〇話。タルムードの原話にはない説明的な付加が目につく。幽霊の正体を最初に「二人の小娘」と明かし、雨期入りをユダヤ暦で特定する。これは中世フランスの律師ソロモン・ベン・イサク（通称ラシ、一〇四〇—一一〇五）の有名なタルムード註釈を話中に組み込んだものである。そのほか目につくのは、「女房に叱られ」うちに入れず「女房が怖くて（墓場に行つて寝る）」「女がしょっちゅうすることだが（喧嘩になつて）」と女房あるいは女性一般の性格のキツさを強調するところ。相当の女嫌いだつたのだろうか、どうも著者はこの話を「大きな功德も女房の出来が悪いと不意になる」という訓話あるいは例話として理解したらしい。

なお、これに続く第一二二話は「ゼイリと家主」、出典はやはりタルムード祝祷篇である。話は短い。主人公ゼイリは女に鞍袋を預けて外出したが留守中に女は急死する。ゼイリが墓に行くと女は（どこからか）鞍袋の仕舞い場所を覚えてくれたという。おそらく『故事書』著者は、先の話の善男の女房にひきかえ、気が利く律儀な女の見本を提供したのだろう。

しかし、これをタルムードの原話と比べると幾つかの違いがある。まず、女はゼイリの家主で、ゼイリが預けるのは財布。そして、女はゼイリに財布の隠し場所を教えるついでに頼み事をする。「化粧品を持ってこなかったので、某に渡してほしい。某は明日こちらに来る（つまり、死ぬ）から」という。実は、先ほどの話に戻るが、タルムードの文脈上、これが「善男と幽霊」の件に続いて「死者は、この世の出来事を感じする」ことの証拠に提出される第二の事例なのである。何故か。死んだ家

主がゼイリに某の死を予告する。人の死は「この世の出来事」である。そして、このことは家主とゼイリの会話した時点ではまだ実現していないので、善男と幽霊の一件のように「目撃者が死んで、あの世で家主に話した」可能性はない。ゆえに「死者は、この世の出来事を感じする」、それどころか予知もする。しかし懷疑派は言う、「あの世で家主はドゥマ（死を司る天使、さしづめ日本で言うところの「死神」「閻魔」）の宣告を聞いておったのかもしれないぞ」。死の管轄は「あの世の事柄」ではないか、証拠不十分。

そこで肯定派は、第三の事例を持ち出す。『故事書』未収、「サムエルと亡父」の話である。主人公サムエルは高名の律師。彼の父は、孤児たちの金を預かったまま死んだが、その金の在処が分からないので「さては孤児の金を使い込んだのだろう」と噂された。サムエルは墓場に行き、父の霊を探す。探し当てたところ、あの世の学塾で父はなぜか泣き笑いしているの、わけをたずねると「泣くのは、もうすぐお前もこちらに来るからだ。笑うのは、お前の評判がいいからだ」と答える。そして、孤児たちの金の保管場所を教える。サムエルの父は、息子の死が近いことを知って泣いている。けれども、この時点で死天使ドゥマの宣告はない。サムエルは死なずに金を探し出すからである。ゆえに「死者は、この世の出来事を感じする」、それどころか予知もする。しかし懷疑派は言う、「サムエルほどの偉い人となれば、あの世に席が予約されることもあろうよ」。

なお論義は続くが、これ以上は長くなるので立ち入らない。結論を要するに、死者に届こうが届くまいが、哀悼し追憶するのが生者の務めである。ともかく、こうした論義を一種の枠物語として語られる話中話三題のうちのひとつがタルムードの「善男と幽霊」であった。その枠を、いわば、『故事集』著者は外して中身の三話を取り出し、一話の細部に

は手を入れ、うち一話の後半と、あと一話をまるごと切り捨てたわけである。

『故事書』と違い、『ヤコブの泉』は「善男と幽霊」「ゼイリと家主」「サムエルと亡父」の三題を論義の枠ごと収め、一括りに第六〇話とする。著者ヤコブ・イブンハビブの主眼は、説話の取材源タルムード自体の趣向を読者に紹介することにある。ほぼ忠実に原典を転写するので、本文中に語釈や解説の類を編み込むことはしない。そのかわり、中世の代表的註釈作品の引用に作者本人の見解を添え、これを「著者言」として本文の欄外に掲示する。さて第六〇話の著者言は、その大半を「善男と幽霊」の解釈に費やす。手こずっているのである。説話解釈の技法を示す恰好の例として、以下に参照する。

### 3. 中世説話解釈の一例、『ヤコブの泉』著者言

『ヤコブの泉』祝祷篇第六〇話著者言は「善男と幽霊」の説話について疑義を呈する。まず、主人公の性格。「善男」ならば夫婦円満であつてしかるべきところを、よりによって善行がもとで喧嘩する。次に、主人公の行動。喧嘩して家にいらなくなるだけならまだしも墓場で野宿するとは何事か。大晦日は身を浄めて歳の改まりを迎えるべきとき、死は不浄の極みなので「善男」ならば先ず墓場には近づかない。そして、現実とは思えない話の展開。墓場で幽霊の声が聞こえるなど、あり得ない。死者の霊は肉体を離れて極楽に行くので墓の下には枯骨あるのみ、それが「常識」というものだ。さらに、この「善男」は問題行動を繰り返す。最初、墓場に野宿したのは已むを得ぬでしょう。そこで幽霊の声を聞いたとしても（仮にそのようなことがあるとすれば、だが）偶然のことであつたか。しかし翌年も、その翌年も墓場へ足を運ぶのは、故意であろう。それも幽霊の天気予報を聞きにいくためとしか思えない。降

霊術の類いは重大な律法違反である。「善男」とは徳のすぐれた行儀正しい人であらねばならぬ。

以上、こうした難問を解決するために著者の用いる手段は、説話の「史実化」「合理化」「倫理化」である。まずは説話の「史実化」。先ほど触れた中世フランスの律師ラシのタルムード註によれば、タルムードに「善男の件」として紹介される説話の「善男」とは凡そババの子ユダ先生かイライの子ユダ先生であるという。いずれも二世紀に活躍した律師である。このラシ説を『ヤコブの泉』著者は「善男と幽霊」の件に適用するのである（この件について実際にラシがどう考えていたかは不明）。西暦一三二年、ユダヤ人はローマ帝国に対して大反乱を起こした。指導者の名にちなみ「バル・コホバの乱」と呼ばれる。戦中戦後の悲惨な状況、それにもかかわらず学問に精進する律法学者の姿を描くユダヤ説話は多い。そうした説話の主人公がババの子ユダ先生やイライの子ユダ先生、あるいは「善男」なので、この説話もその一つであろう。これは作り話ではない、実話である。そして主人公は、匿名ながら「善男」と呼ばれるにふさわしい偉人である。とすれば、その後の話の荒唐無稽のように思える展開にも、主人公の不可解な行動にも、実は理があるにちがいない。こうして、説話の「史実化」は説話の「合理化」につながる。飢饉には天候のみならず戦後の食料難、物資難も大きくあずかっていた。かの善男も生活苦にあえぐ身であつたはずで、あの大晦日の晩、貧者にほどこした銀貨もなければ一枚だったろう。女房がなじるのも無理はなかつたかもしれないが、男はひどく落ち込んだ。いつそ死んでしまいたいとすら思い、神に救いを求めつつ、眠りについた。そうした男の思いが、その晩の夢に作用したのである。強く死を念じたので、舞台は墓場、登場人物は幽霊、そして幽霊が女であるのは、女房と喧嘩したから。また、神に救いを求める気持ちだが、天上の御前会議を幽霊が伝える形となつ



て夢に現れた。もしかすると、天に飛翔する霊と、墓に閉じこもる霊は、それぞれ神に祈る崇高な精神と、ひたすら腹を満たしたいという単純な欲求の葛藤をあらわすものかもしれない。そして幽霊の告げるとおりに種を蒔いて二度まで富を得て、三度目に女房のせいで御破算となる。ここで男は夢から覚めた。そして実際、夢のとおりに種を蒔いたところ、二年にわたり収穫に恵まれたので、この一件を律法学者たちに報告した。彼らは協議の末に、こう結論した。神は、善男の親切に報いて祈りに応え、かつ夫唱婦隨の訓を垂れるべく、かような夢を見せたもうたのである。

以上、『ヤコブの泉』著者言によれば、この説話のうち実際の出来事は「飢饉の年に善男が貧者にほどこしをしたことで女房と喧嘩した」という設定だけで、あとは夢、ただし、その夢で「二度にわたり富を得た」ことのみは事実である。こうした説話の「合理化」は、説話の「倫理化」にかかわる。この説話が「不合理」であるのは、主人公が「善男」にふさわしくない振る舞いをする（大晦日の禁忌を犯す、降霊術を意図して繰り返し）ことも含まれるからである。しかし墓場の一件は夢であるとすれば、「非常識」な描写（墓場に住う幽霊）にも説明がつくうえ、主人公の行動に何ら落ち度はないことになる。その点おもしろいことに『故事書』著者はわざわざ「（善男は翌年も）小娘たちの話を聞こうと（墓場に行った）」と言い添えている。主人公の行為には特に問題を感じなかったらしい。それはさておき『ヤコブの泉』著者言は説話の結末に一種の「後日譚」を添える。「善男」は一件を律法学者たちに報告したという。これもまた説話の史実化の一環である。先ほども述べたとおり、この説話はタルムードの論義、つまり「死者は、この世の出来事を感じするかどうか」をめぐる問答を枠物語とする一種の話中話である。学術談義に用いられるからには、ある段階で「資料」として律師の衆院に提

出、受理されたにちがいない。そうした成立史を説話の結末に織り込んだ——あるいは枠物語全体を史実化したわけである。

#### 4. 民俗学の適用、当該説話の特徴

一見奇怪な古代説話を、『ヤコブの泉』著者は中世当時の常識に見合う実話、あるいはユダヤ教の行儀にかなう例話に仕立て上げようと算段する。その手法には確かに強引な側面もあるが、捨て去るには惜しい洞察を多々含む。要するに、この説話の問題は第一に、時代と場所と人物を特定できないこと。第二に、明確な教訓を見出せないこと（少なくとも宗教権威の公認する倫理や行儀とは相容れないこと）。第三に、実際の事件としては信じ難いこと（それこそ夢でもないかぎり全く同じ出来事が三度も繰り返されるのは不自然）。しかし第四に、この説話は不自然、奇妙であるにもかかわらず、現実味のある話として受容されていたらしいこと。以上、卓見である。

ただ、この説話について『ヤコブの泉』著者の指摘する幾つかの不自然な点は、民間伝承、とりわけ「昔話」の特徴としては、むしろ自然ではないだろうか。無名の主人公、不特定の時代と場所。事件の三度反復。また、お人好しの無欲な亭主に強欲な女房。ささやかな善行の報いに一旦は富み栄え欲をかい破綻する。いずれも世界中の昔話に共通して見られる設定と展開である。

なお大晦日に死者が富をもたらすとなると、いわゆる「大歳の客」説話との共通点も看過できない。日本文化研究者としては柳田國男の提唱する「祖霊」信仰説や折口信夫の提唱する「まれびと」説などを適用してみたところだろう。恥ずかしながら筆者はそちらの方面に疎いので読者諸氏のお知恵を拝借したいのだが、<sup>(18)</sup>その際に留意すべき点をユダヤ古典文献学者として幾つか提示したいと思う。

## 5. 比較文学研究上の問題と課題

「善男と幽霊」の成立背景について私見を述べる。この説話は、もともと小さな農村に伝わる民間伝承であつたらしい。そう思う理由は、第一に、物語の構造に昔話固有の特徴が見られること。第二に、主人公の得る富が農作物であること。第三に、そうとう狭い範囲の人付き合いを前提していること（たまたま墓場で目撃した幽霊の姿形から、その母親を特定できてしまうほど）である。

しかし柳田の「祖霊」や折口の「まれびと」概念をそのまま適用することはむづかしいと思われる。その理由は第一に、新年に死霊ないし異人の来訪する例は他にあるか（あるとすればどのように語られるか）大量のユダヤ説話を類話のみならず同話の異型も含めて採集しないうちは迂闊なことを言えないから。第二に、少なくとも現存する形の「善男と幽霊」説話が成立した時期はけっこう新しいように見えるからである。たとえば折口は「まれびと」説話の成立背景に古代の閉鎖社会を想定しているらしいが、ここで主人公が貧者に施す「デナリ」はローマの通貨単位。パレスチナがローマ帝国の支配権に入るのは紀元前六三年以降だし、その貨幣経済が小村にまで波及するとなると更に時代は下るだろう。また外貨が普及しているとすればさほど閉鎖的とも思えない。もっとも、こうした話の細部は聞き手に分かりやすいよう伝承過程で変更されることが多いので（たとえば『故事集』は貨幣を「シリング」に換えている）、決定的な目安にはならないが無視するべきではない。また、言語上きわめて不可解な事実がある。ナザレのイエスの時代すでにユダヤ人は日常会話をアラム語で交わし、ヘブライ語は専ら儀式典札や律法談義に用いられていた。さて実際、タルムード中この「善男と幽霊」および「ゼイリと家主」「サムエルと亡父」の三話を収める枠物語としての論義はア

ラム語で行われる。「ゼイリと家主」「サムエルと亡父」の二話もアラム語。ところが妙なことに「善男と幽霊」の件のみはヘブライ語。つまり、民間伝承の性格が色濃いにもかかわらず一種の「文語」体で語られるのである。何故か。さしあたり思いつく可能性は三つ。まず、民話風の文学創作であつたか。あるいは、タルムードに収められる以前すでに律師ら文人の手直しが入ったか。それとも、ヘブライ語を日常に用いていた遙か昔にまで遡るか。

以上、性急に解答をひねり出す必要はないだろう。この説話ひとつを理解しようとするうえで最低限必要な作業と事項を確認したところで、一応の区切りとする。<sup>19)</sup>

### 注

- (1) 以下、語句を解説すると共に並行伝承の異同を示す。略号については註15・17を参照のこと。大晦日の晩に：ARNa欠。デナリ：ローマ通貨単位（銀貨）、MB「シリング」。施した：MB「神の御名において」付。
- (2) 女房に叱られ：MB「うちに入れず」付。墓場に行つて寝ると：MB「女房が怖くて」付。幽霊二人：MB「近ごろ死んだ二人の少女」。声がした：直訳「聞こえた」。
- (3) そとをうるついで：MB「飛んで」。御簾：原語「バルゴード」（ギリシャ語由来のラテン語）。天上の御前会議を隔てる。
- (4) それは無理：ARNa「出るのは無理」、MB「起きるのは無理」。葦の布を巻かれちゃった：直訳「葦の布で葬られた」。遺体を包む布は、ふつう亜麻。
- (5) うろついてきた：ARNa「行つてきた」。御簾の後ろで何を聞いたの：ARNa「御簾の後ろで何もかも聞いたんでしょ、世間にど

んな厄がつく」。

- (6) 九月の末に：直訳「初の小雨で」、MB「マルヘシユヴァン月の中頃より前に」(ユダヤ暦八月、西暦十～十一月)。
- (7) 十月の初めに：直訳「二度目の小雨で」、MB「マルヘシユヴァン月の中頃より後に」。
- (8) 翌年も：MB「小娘たちの話を聞こうと」付。事の次第を：MB「何があったか、小娘たちがどんな話をしたか、そして、そのうち一人が葦の布で葬られていて起きられなかったことも、全部」。
- (9) それから幾日もしないうち：ARNa「数日後」。
- (10) あの小娘：MB「葦の布で葬られた娘」。喧嘩になって：MB「女がしょっちゅうすることだが」付。
- (11) 言ったそうな：ARNa「言った」、MB「捨て台詞を吐いた」。
- (12) 一方が……と言つと：EY 欠。
- (13) よしてよ：MB「何も言わないで」。生きてる人に：MB 欠。
- (14) タルムード (正確には最終編纂地の名を冠し『タルムード・バブリ』あるいは『バビロニア・タルムード』全六部六三篇について最良の入門書はA・コーヘン著『タルムード入門』全三巻(村岡崇光・市川裕・藤井悦子訳、教文館、一九九八年)。
- (15) 略号 ARNa。校訂版 Solomon Schechter, ed, *Avroth de Rabbi Nathan with references to parallels in the two versions and to the addenda in the Schechter edition by Menahem Kister* (New York, Jerusalem: Jewish Theological Seminary of America, 1997). 英訳 Judah Goldin, *The Fathers According to Rabbi Nathan* (New Haven: Yale University Press, 1954).
- (16) 略記 EY。
- (17) 略号 MB。原語イディッシュ。英訳 Moses Gaster, *Maaseh Book*.

*Book of Jewish Tales and Legends translated from the Judeo-German*, 2 vols. (Philadelphia: Jewish Publication Society of America, 1934). ちなみに訳者モーゼス・ガスターはルーマニア民話集『りこうなおきさき』(太田大八訳、岩波書店、一九六三年)の編者。

- (18) ユダヤ説話「善男と幽霊」を、日本民話の一類型「大歳の客」の諸要素と比較する。

- 1) 類似点その 1. 歳末。
  2. 善人の救済。
  3. 死者のもたらず富。
- 2) 相違点その 1.
  1. 「大歳の客」 主人公は、旅人に糧をほどこし金をもうける。
  2. 「善男と幽霊」 主人公は、貧者に金をほどこし糧をもうける。
  3. 「大歳の客」 宿を求める旅人を、主人公は家に入れる。
  2. 「善男と幽霊」 貧者に金をほどこした主人公は宿を求めて、家を出る。
  3. 「大歳の客」 旅人 II (主人公に富をもたらず) 死者。
  2. 「善男と幽霊」 貧者 # (主人公に富をもたらず) 死者！
  1. 類似点その 1. 異形のもたらず富。
  2. 妻の妨害。
  3. 秘密の露見による破綻。
- なお参考に「動物報恩譚」と比較する。

2) 相違点その1.

「動物報恩譚」 異形Ⅱ生物。

「善男と幽霊」 異形Ⅱ童女の死霊。

2.

「動物報恩譚」 異形Ⅱ報恩者。

「善男と幽霊」 異形Ⅱ報恩者！

こうして見ると、ひととき奇妙なのは「善男と幽霊」の場合、主人公がどこしをする貧者と、主人公に富をもたらす死者には何の関係もない、つまり「恩返し」一般の図式が成立しないことである。

(19)

以上、立教大学日本学研究所二〇一二年度第一回例会シンポジウム「世界の説話と日本」講演内容を再構成した。

(聖公会神学院、東京大学、農村伝道神学校非常勤講師)